

消化器外科レジデントマニュアル 第2版

小西文雄 監修

自治医科大学附属さいたま医療センター一般・消化器外科 編著

＜書評者＞ 小林一博（茅ヶ崎市立病院一般・消化器外科診療部長）

平成 16（2004）年に新臨床研修制度が導入され、卒後研修先が大学から市中病院に大幅にシフトしてきているのは周知の通りである。当院でも臨床研修医のみならず、大学病院での外科修練を経ない後期研修医が勤務する事態となっている。第一線病院における医師養成の比重は増大しているが、指導する側は勤務医としての過剰な業務量のため、研修医教育に時間的制約を受けている。このような状況では当然知識や経験は不足、偏りがちとなる。そのため外科を目指す若手医師には、その分野を網羅する知識を集約したマニュアルが不可欠となる。さらにそのマニュアルが診療現場で直ちに役に立つのであれば理想的である。『消化器外科レジデントマニュアル』初版の販売部数は予想をはるかに凌駕したと聞いている。この事実は本書が時代のニーズに見事にマッチしたことを示している。今般、最新の知見を取り入れて改訂され、第2版が出版された。

本書の特徴は、①医療安全にも配慮され、修練すべき事項を広範囲に網羅していること、②研修医

が経験すべき重要な疾患、診療手技が重点的に詳述されていること、③現場で役に立つ具体的内容であることであろう。

内容としては総論と各論から構成されている。総論は術前検査の進め方、抗生物質使用の原則、インフォームド・コンセント、全身合併症と周術期管理、緩和医療など10章に及んでいる。術前・術後管理は当然としても、第7章内視鏡下手術の基本、第10章 stapling device の種類と使い方などは、腹腔鏡手術や器械吻合全盛の時代にあつては必須の知識であり、今までにない的確な視点で編集されている。特に stapling device は似て非なるものも多く、研修医のときからその使用に慣れしておくことが肝要と自身の経験から痛感している。また、インフォームド・コンセントの章も秀逸である。コミュニケーションやインフォームド・コンセントの注意点、文書化の必要性など、医療の根幹にかかわる問題をわかりやすく解説している。管理職の立場からすれば、医療安全の面からも、まずこの章を熟読してから実際の診療に従事してもらいたいと切に

願うものである。

各論は各消化器疾患の項目に分かれている。消化器癌に関しては、既掲載の癌取扱い規約の改訂はもちろん、大腸癌、胆道癌の取扱い規約も新たに追加され、さらに使いやすくなった。ガイドラインも新たな内容が盛り込まれ、抗癌剤治療にまで記述は及んでいる。

研修医に馴染み深い虫垂炎は診察法、超音波検査による画像診断、手術法などが丸々1章費やして詳述されており、充実した内容となっている。市中病院では頻繁に遭遇する術後癒着性イレウスも、独立した項目として症状から治療まで解説されていることは心強い。

各項目の記載は簡潔明瞭であり、カラー写真や図表も多く、理解しやすい。使用薬剤には一般名のほか商品名も併記されており、投与方法も具体的である。研修医の立場に立った、まさに user-friendly なマニュアルである。当院の研修医もポケットに入れて日夜愛用しており、外科専門医をめざす若手医師には必携の書である。

●B6 変型 頁 368 2009 年
定価 4,410 円
（本体 4,200 円＋税 5%）
[ISBN978-4-260-00851-8]
医学書院